

情熱に関する心理学研究の概観—Vallerandの情熱研究を中心に—¹

羽鳥 健司² 石村 郁夫³

本研究は、これまでに行われた情熱に関する心理学的な実証研究を概観した。情熱とは、“個人が好きで重要視している活動に対する傾倒の程度であり、その活動に多くの時間とエネルギーを投資している”と定義されている (Vallerand et al., 2003)。情熱は、さらに強迫的情熱と調和的情熱の二つの下位因子によって構成されており、このモデルは情熱の2因子モデル (Vallerand et al., 2003) と呼ばれている。強迫的情熱は、ある活動が何らかの圧力によって個人のアイデンティティに内在化された結果、形成される。調和的情熱は、個人のアイデンティティに活動が自律的に内在化された結果、形成される。情熱の実証研究は、主にスポーツ選手の情熱とパフォーマンスおよび精神的健康との関連、対人援助専門職に従事している人の仕事への情熱とバーンアウトとの関係、情熱と病的なギャンブルとの関係等について行われている。調和的情熱が強迫的情熱よりも心身の健康やパフォーマンスに良い影響を与えていることを示す研究が多く存在している。以上を受けて、情熱研究の今後の課題について考察を行った。

キーワード：情熱、強迫的情熱、調和的情熱、概観実証研究

はじめに

ポジティブ心理学 (Seligman & Csikszentmihalyi, 2000) は、これまで心理学が人間の病理学的な部分に注目しすぎていたという反省の元に、人間が元来有している能力を十分に発揮することに焦点を当てている。中でも、近年、情熱 (passion) が注目を集めている。情熱は、人が価値ある人生を送るために必要不可欠な要因の一つであると考えられている。実際、我々は情熱を傾けている趣味や仕事に時間を使う際、充実した時間を送っている。トップアスリートは偉大な記録を残すために自らが持っている能力を最大限に引き出すことに情熱を傾ける。また、ある科学者は、

ある現象を解明するために何年もの時間をかけて情熱をもって研究に没頭する。このように、情熱は日々の生活から歴史的な功績に至るまで、様々な場面で人の well-being や人生の意義に影響を与えていると考えられる。

本研究の目的は、情熱の心理学的な実証研究を概観することである。はじめに情熱の心理学的な位置づけについて述べる。次に、これまでに行われた情熱の心理学的実証研究を紹介する。

情熱の心理学的位置づけ

Figure 1は、心理学系の学術論文検索エンジン PsycINFOにて2017年1月30日の時点でタイトルに”

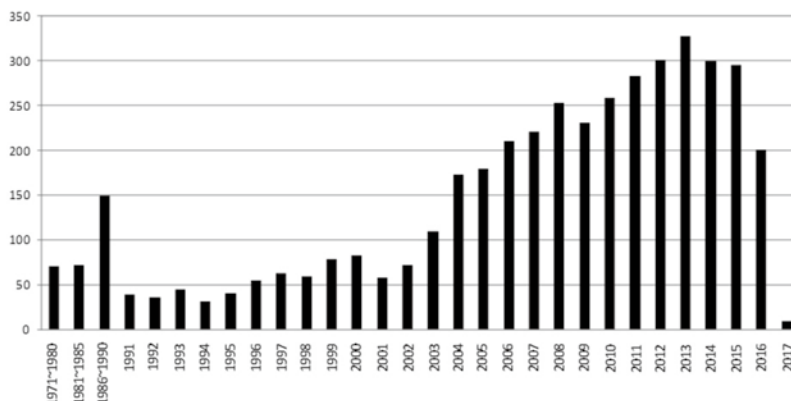


Figure 1 情熱論文発表件数の経年変化

² 埼玉学園大学人間学部人間文化学科

³ 東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科

¹ 本論文は、Vallerand (2008) や Vallerand, Blanchard, Mageau, Koestner, Ratelle, Léonard, Gagné, & Marsolais (2003) の論文を参考にし、まとめたものである。

passion”が含まれていることを条件に検索された論文のうち、1970年以降に公刊された論文数の推移である。2004年以降に公刊された論文の数が増加傾向にある。2016年では減少に転じているものの、決して低い数値ではなく、情熱に関する研究が依然として注目されていることを示唆している。

心理学分野において情熱は、2003年までの間、実証的な研究はほとんどなされてこなかった。数少ない研究の一つであるFrijda, Mesquita, Sonnemans, & Van Goozen(1991)では、情熱を“感情的に重大な結果を伴う優先順位の高い目標”と定義し、動機づけの一種として位置づけている。Frijda et al.(1991)によると、情熱のある人は、特定の目標に到達するために膨大な時間と努力を費やすとされている。またGlasser(1976)は、情熱を依存として位置づけたが、この依存が心理学的に適応的なのかどうかについての議論はなされなかった。これらの他にもGoldberg(1986)は創造性(creativity)の文脈で、またMarsh & Collet(1987)は欲求の一種として情熱を位置づけている。しかし、これらの研究は理論的とは言えない部分を含んでおり、さらに実証的な証拠もほとんど提示されていない。2003年までの情熱に関する実証研究のほとんどは、愛(love)に関する情熱のみである(Hatfield & Walster, 1978)。しかし、これらの研究も情熱自体の学術的位置づけや定義が明確になされているわけではなく、したがって概念について詳細な検討が行われているわけではない。

現在までに、心理学における情熱の実証研究は、Vallerandが提唱したdualistic modelに基づいた研究がほとんどであり、それ以外の心理学的実証研究はほとんど見当たらない(Fredricks, Alfeld, & Eccles, 2010)。したがって、本研究では、以下でVallerandの情熱に関連する実証研究を中心に紹介する。

情熱の2因子モデル

本節では、主にVallerand(2008)に基づいて情熱の2因子モデル(dualistic model)を紹介する。

Vallerand, Blanchard, Mageau, Koestner, Ratelle, Léonard, Gagné, & Marsolais(2003)は、自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)に基づいて、人が持つ基本的な欲求である自律性(autonomy)、有能感(competence)、関係性(relatedness)を満足させる活動に没頭することを情熱として、“個人が価値を置いている(好きな、愛してさえいる)活動に対する愛好の程度であり、その活動に多くの時間とエネルギーを投資している(p.757)”と定義した。また、Vallerand(2008)は、情熱を傾ける活動は、個人の中核を形作るアイデンティティと深く関係しているとした。例えば、プロ野球の選手は、単純に野球に没頭しているだけでなく、自らを心理社会的な“プロ野球選手”として野球に強い興味を持ち、高い価値づけ

を行い、膨大な時間とエネルギーを投資していると考えられる。

興味のある活動が高く価値づけられて内在化される過程には、2種類の情熱が関与している(Vallerand et al., 2003)。一つは強迫的情熱(obsessive passion)であり、もう一つは調和的情熱(harmonious passion)である。強迫的情熱は、ある活動が何らかの圧力によって統制された形で個人のアイデンティティに内在化された結果、形成される。このような内在化の過程を経て個人のアイデンティティの一部が形成され、個人はその活動を価値づけ、制御する。情熱の形成過程は、統合された自己(self)の一部として内在化される場合と、統合された自己とは無関係のアイデンティティとして内在化される場合があり、前者は調和的情熱、後者は強迫的情熱の形成に関与している。そして、後者の場合、心理学的な適応は良くないと予測される(Deci & Ryan, 2000)。統制された内在化は、個人内外の何らかの圧力によってなされていると考えられるため、活動に没頭することには、社会的な受容や自尊心等の特定の報酬が随伴している(Crocker & Park, 2004)。これにより、活動に没頭することから得られる報酬から逃れられず、活動への没頭が個人の統制下になくなると考えられる。したがって強迫的情熱が高い人は、重要視し、楽しいと感じる活動に没頭したいという衝動を抑えることができず、結果として活動を行っている最中、または終了後にネガティブな認知、感情、行動が喚起されると考えられる。例えば、バスケットボールに強迫的情熱を持っている大学生は、友人からバスケットボールに誘われた場合、次の日に重要な試験があったとしても、友人からの誘いを断ることができずにバスケットボールをしてしまう。しかしバスケットボールをしている最中に試験のことが気になり、罪悪感に悩みながら活動していると考えられるのである。

さらに、強迫的情熱を有する個人は、活動を厳格に継続する。これは、強迫的情熱には、活動に対して統合された自己が関与しているのではなく、心理社会的な自我が関与しているからであり(Hodgins & Knee, 2002)、したがって、個人は活動に依存するのである。もしパフォーマンスが向上するなどの何らかの利益が獲得できた場合、活動はさらに継続される。しかしこの利益は個人にとっての随伴物としてのみ認識されるため、個人の活動に対する取り組みは柔軟性に欠け、結果として個人が有する最大限の機能を引き起こすには至らない。加えて、特定の活動に対する厳格な継続は、他の活動との間に軋轢を生む。個人は、強迫的情熱を傾けている活動を行っている最中は、本来行わなければならない他の活動のことが気になる一方で、強迫的情熱を傾けている活動を中断すると、中断したことに対しても思い悩むのである。

一方で、調和的情熱は、個人のアイデンティティに活動が自律的に内在化された結果、形成される。自律的な内在化は、活動に何の随伴物も付随せずに、個人が純粋にその活動が重要であると認めた時に起こる。この型の内在化は、自己の内発的、統合的な傾向から生じる (Deci & Ryan, 2000)。従って、純粋に活動に没頭したいという動機づけによって活動が自発的に価値づけられ、その活動を追い求めることに対する葛藤は個人内に存在しないと考えられる。また調和的情熱を有する個人は、活動に対して統制できないような強い衝動を持っておらず、むしろ自由にその活動を選択しているという感覚を持っている。個人にとって、その活動は重要ではあるが、圧倒的な支配力を持っているわけではなく、生活していく上で必要な他の活動との間で調和していると考えられる。調和的情熱によって、個人の本来の統合された自己が、その活動に完全に没頭できるため、ポジティブな経験に対して自己が開かれた状態になると考えられる (Deci & Ryan, 2000; Hodgins & Knee, 2002)。その結果、調和的情熱を有する個人は、情熱を傾けている活動を行っている時はその活動に完全に没頭して、活動中も活動終了後も高い集中力や満足感などのポジティブな経験をしているものと考えられるのである。調和的情熱は、「一生その活動ができなくなる」ことが判明した時にネガティブ感情が喚起されるが、その活動を続けることで人生にネガティブな結果の方が大きくなると判明した時点でその活動の継続を諦めることができる点において、柔軟であるとみなされる。一方で、強迫的情熱は、「今その活動ができない」時にネガティブ感情が喚起される。

近隣概念との異同

本節は主に Vallerand et al. (2003) に基づいている。フロー (flow) (Csikszentmihalyi, 1978) と情熱は、個人が価値づけている特定の活動に完全に没頭しているという点において共通していると考えられる。しかし、フローは活動中の状態や現象を表す概念であるのに対して、情熱は活動に対する態度または動機づけであると考えられる。実際、情熱は、フローに正の影響を与えることが示されている。したがって、情熱の高い人は低い人に比べてフローを経験する頻度が高いと考えられる。またフローは、調和的情熱から正の影響を受けるが、強迫的情熱からは有意な影響は受けないとされている。ただし、日本の一般大学生を対象にした Hatori, Ishimura, Ichimura, & Koganei (2013) の研究では調和的情熱と強迫的情熱はフロー体験とそれぞれ $r=.47$, $r=.25$ との正の相関関係にあるため、一般大学生とアスリートの間には差が予想されるために今後の研究が望まれている。

内発的動機づけと情熱は、活動を行うことが好きであるという点において共通していると考えられる。

しかし、内発的動機づけは、活動は個人のアイデンティティに内在化されているわけではなく (Deci & Ryan, 2000)、また内発的動機づけにより個人が活動に従事する時間は、短期間である (Koestner & Loiser, 2002)。これに対して情熱は、活動は個人のアイデンティティに内在化されており、活動に従事する時間は数ヶ月単位以上の比較的長期間である。

外発的動機づけは、活動自体が好きなわけではない。外発的動機づけと情熱の本質的な違いは、活動が好きか否かであるとされている。

情熱の実証研究

情熱の実証研究は、主にスポーツ選手の競技への情熱、企業の会社員や看護師や教師等の対人援助専門職に従事している人の仕事への情熱、大学生、高校生、中学生の勉強および課外活動への情熱、ギャンブルへの情熱、一般の人の趣味への情熱を対象に行われている。

情熱を測定する尺度

筆者らが知る限り、情熱を定量的に測定できる尺度は、Vallerand et al. (2003) が、個人が特定の活動に対して有する情熱の程度を測定する尺度として開発した情熱尺度 (Passion Scale) のみである (この邦訳版には Hatori, Ishimura, Ichimura, & Koganei (2013) がある)。この尺度は、情熱の定義である“個人が価値を置いている (好きな、愛してさえる) 活動に対する愛好の程度であり、その活動に多くの時間とエネルギーを投資している”ことに対して個人が有する情熱の程度を測定できる。彼らは上記の条件を満たし、かつ生活する上で必要な他の活動との葛藤の程度、および中核的なアイデンティティに関与している程度を測定するための34項目で構成される予備尺度を作成した。彼らは、特定の活動に対して平均で1週間に8.5時間ずつ6年間継続している大学生を対象に調査を行った。探索的因子分析の結果、理論的な予測通りに強迫的情熱 (例えば, "I almost have an obsessive feeling toward this activity") と調和的情熱 (例えば, "This activity is in harmony with other activities in my life") の2因子が抽出された。スポーツ選手 (Vallerand, Rousseau, Grouzet, Dumais, & Grenier, 2006)、ギャンブルをする人 (Castelda, Mattson, MacKillop, Anderson, & Donovan, 2007; Rousseau, Vallerand, Ratelle, Mageau, & Provencher, 2002)、企業の会社員 (Vallerand & Houffort, 2003) を対象とした別の調査で行われた確認的因子分析でも、この2因子モデルが採用された。また、調和的情熱と強迫的情熱をそれぞれ統制した強迫的情熱および調和的情熱と、活動に価値を置いている程度、および活動が中核的なアイデンティティに関与している程度との間で偏相関分析を行った結果、有意な正の相関関係にあっ

た。また、生活する上で必要な他の活動との葛藤の程度との間には、強迫的情熱とのみ有意な正の相関が認められ、理論的な定義が統計的に支持された。

さらに、強迫的情熱と調和的情熱は異なる感情状態と関連していることが実証された (Vallerand et al., 2003)。強迫的情熱を統制した上での調和的情熱は、活動に没頭している間のフローおよびポジティブ感情と有意な正の相関関係にあり、活動終了後のポジティブ感情の高さおよびネガティブ感情の低さと正の相関関係にあった。逆に調和的情熱を統制した上での強迫的情熱は、活動に没頭している間および活動終了後の恥および不安と正の相関関係にあり、活動を中断させられた時のルミネーションと正の相関関係にあった。

情熱が精神的健康に与える影響

強迫的情熱および調和的情熱と心身の健康を表す諸変数との関連については多くの実証研究が行われている。特に、情熱が楽しさ、活力、暖かさ、満足感等のポジティブ感情に与える影響について興味深い知見が得られている。

ポジティブ感情は、個人が有する認知的スキルや社会的スキルへのアクセスを容易にし、その結果調節機能を上昇させる (Fredrickson, 2003)。また、ポジティブ感情は個人の思考・行動レパトリーを増大させ (Fredrickson, 1998, 2001, 2003)、これにより個人は状況に適したより適応的な行動を選択することになり、結果として心理学的な調節機能が向上する (Fredrickson & Joiner, 2002)。実際、ポジティブ感情が情熱と心身の健康を表す諸変数との間の媒介変数であることが実証されている。ここでは、情熱とポジティブ感情との関連を中心に、情熱が心身の健康に与える影響について検討された実証研究を概観する。

Vallerand et al. (2003) は、フットボール選手へのフットボールに対する調和的情熱は、シーズン中の一般的なポジティブ感情に正の影響を与えることを示した。逆に強迫的情熱は、ネガティブ感情に正の影響を与えていたことを示した。また、高齢者の特定の活動に対する調和的情熱は、人生の満足感、人生の意味、活力の高さおよび抑うつと不安の低さを予測した。逆に高齢者の強迫的情熱は抑うつと不安の高さを予測し、人生の満足感の低さを予測した (Rousseau & Vallerand, 2003)。高齢者の研究と同様の結果が、10代の若者でもみられた。特に、若者の調和的情熱は人生に対する満足感と活力に強い正の影響を与えた (Vallerand, Maegau, Elliot, Dumais, Demers, & Rousseau, 2008 ; V allerand, Salvy, Mageau, Elliot, Denis, Grouzet, & Blanchard, 2007)。逆に若者の強迫的情熱は人生に対する満足感と活力に負の影響を与えていた (Vallerand, Salvy et al., 2007) か、あるいは有意な影響を与えていなかった (Vallerand, Salvy et al., 2007; Vallerand, Maegau et al., 2008)。同様

の結果が、教師を対象とした研究でも得られている。Carbonneau, Vallerand, Fernet, & Guay (2008) は、教師を対象として3ヵ月間の縦断的検討を行った結果、調和的情熱は3ヵ月後の調和的情熱、仕事への満足感、生徒のポジティブな行動 (協力的な行動や勉強や行事に熱心に取り組む等) を促進し、バーンアウトを抑制した。一方で、強迫的情熱は3ヵ月後の強迫的情熱と生徒のポジティブな行動を促進したが、バーンアウトには有意な影響を与えなかった。

以上の結果は、情熱を傾けている活動が存在する個人は、週に平均8.5時間活動に従事していることを考えると、調和的情熱で特定の活動に没頭している個人は、ポジティブ感情を週に8.5時間経験していることを表していると考えられ、その結果、心身の健康が上昇すると予測できる。実際、ポジティブ感情が心身の健康を媒介していることは、二つの研究で実証されている。Rousseau & Vallerand (2008) は、様々な身体活動に対して情熱を傾けている高齢者を対象にして縦断的な検討を行った。その結果、調和的情熱はポジティブ感情の生成を予測し、ポジティブ感情が主観的幸福感に正の影響を与えていた。一方で強迫的情熱はポジティブ感情に有意な影響を与えてなく、ネガティブ感情の生成を予測していた。ネガティブ感情は主観的幸福感に有意な影響を与えなかったが、強迫的情熱は主観的幸福感に負の影響を与えていた。Vallerand, Paquet, Philippe, & Gharest (2010) は、看護師を対象として、情熱がバーンアウトに与える影響について検討した。結果、仕事に対する調和的情熱は、仕事に対する満足感を介してバーンアウトに負の影響を与え、かつ仕事と仕事以外の活動との間に感じる葛藤に負の影響を与えたのに対して、強迫的情熱は仕事と仕事以外の活動との間の葛藤を介して、バーンアウトに正の影響を与えていることを示した。

上記の研究では、調和的情熱は満足感等のポジティブ感情を媒介して精神的健康に正の影響を与えることが示されたが、強迫的情熱と精神的健康の間を媒介する変数が存在しなくても、強迫的情熱は精神的健康に負の影響を与えることがあった。これは、強迫的情熱は、情熱を傾けている活動を厳格に継続させるからであると考えられる (Vallerand, 2008)。情熱を傾けている活動の継続に正の影響を与えるという点において、強迫的情熱と調和的情熱は共通している。しかし、調和的情熱では、人が活動を統制しているため、その活動を一時的に中止しようと決定した場合、他の活動との間に葛藤を感じることなく途中で中止することができるだけでなく、もし情熱を傾けている活動を継続することで長期間にわたってネガティブな出来事が起こると判断がなされた場合、永久的に中断することもできるのに対して、強迫的情熱では、情熱を傾けている活動が人を支配しているため、活動を続けるこ

とで例え重大で永久的なネガティブな出来事が起こったとしても、厳格に活動が継続される。よって厳格な活動の継続は精神的健康に負の影響を与えると想定される。以上のプロセスの一部は、実証的に示されている。すなわち、ギャンブルによって離婚や失職しているにも関わらずギャンブルを中止することができないギャンブル依存者と健全にギャンブルを楽しむ人を比較した研究では、ギャンブル依存者は健全にギャンブルを楽しむ人に比べてギャンブルに対する強迫的情熱が有意に高かったが、調和的情熱に有意差は認められなかった。また、ギャンブル依存者の強迫的情熱の得点は、調和的情熱の得点と比べて有意に高かったのに対して、健全にギャンブルを楽しむ人では強迫的情熱の得点と調和的情熱の得点の間に有意差は認められなかった (Vallerand et al., 2003)。また、ギャンブルをする人を対象とした別の調査では、強迫的情熱は病的なギャンブルの依存に正の影響を与えていたのに対して、調和的情熱は有意な影響を与えてなかった。(Philippe & Vallerand, 2007; Ratelle, Vallerand, Mageau, Rousseau, & Provencher, 2004)。ただし、バスケットボール選手を対象とした調査では、強迫的情熱も調和的情熱もバスケットボールの練習を継続することに対して正の影響を与えていた (Vallerand et al., 2008)。

情熱が精神的健康に与える影響をまとめると、調和的情熱はポジティブ感情を媒介変数として精神的健康に正の影響を与えるのに対して、強迫的情熱は精神的健康に有意な影響を与えないか、負の影響を与える。これは強迫的情熱が、情熱を傾ける活動を厳格に継続させるからであると考えられる。

情熱が身体的健康に与える影響

情熱が身体的健康に与える影響を検討した研究は2つ存在する。一つは、カナダのケベック州プロヴィンス地方でサイクリングに情熱を傾けている人を対象とした研究である。プロヴィンス地方は、春、夏、秋は快適な気候であるが、冬は非常に低温になるだけでなく、降雪等による道路の凍結により、サイクリングを行う場合は、転倒や滑落の危険性が極めて高くなる。Vallerand et al. (2003) は、強迫的情熱が活動を厳格に継続させるかどうかを検討するために、プロヴィンス地方でサイクリングに情熱を傾けている人を対象に調査を行った結果、2月にサイクリングを行っていた人の強迫的情熱は行ってなかった人と比較して前年8月の段階で有意に高かったことを示した。調和的情熱に有意差は認められなかった。以上から、Vallerand et al. (2003) は、強迫的情熱が活動を厳格に継続させることによって転倒や滑落等の身体的な危険性に関与していると結論づけた。

情熱がより直接的に身体的健康に影響を与える影響について検討した研究として以下の研究を挙げるこ

ができる。Rip, Fortin, & Vallerand (2006) は、ダンスに情熱を傾ける大学生のスポーツ選手を対象として、情熱が練習による怪我に与える影響について検討した。その結果、強迫的情熱も調和的情熱も練習中に怪我をする危険性を抑制していた。大怪我には負の影響を与えていた。この結果は、どちらの情熱も準備運動や競技に対するフィットネスを高めることで練習中の怪我を防止していると考えられる。しかし、慢性的な身体の痛みに対しては、強迫的情熱のみが正の影響を与えていた。具体的には、強迫的情熱は痛みを無視すること、痛みがあっても練習を中断しないこと、プライドが適切な治療を受けることを妨げることに正の影響を与えていた。一方、調和的情熱は、痛みや治療に関する情報収集、練習を中止することに正の影響を与え、痛みを無視すること、痛みを隠すこと、プライドが適切な治療を受けることを妨げることに負の影響を与えていた。

以上をまとめると、強迫的情熱は、情熱を傾ける活動を厳格に継続させることで身体的健康に負の影響を与える。調和的情熱は、状況に応じて活動の継続を継続するか否かを柔軟に変化させることで、身体的健康に正の影響を与える。

情熱と対人関係との関連

前述したように、強迫的情熱は、情熱を傾けている活動と生活を送る上で必要な他の活動との間に葛藤を生じさせるが、この葛藤は情熱を傾けている活動と対人関係の間にも生じるということが実証されている。Séguin-Lévesque, Laliberté, Pelletier, Blanchard, & Vallerand (2003) は、インターネットでのネットサーフィンに情熱を傾ける人のネットサーフィンに対する情熱と配偶者との関係性の関係について検討した。その結果、ネットサーフィンをする時間を統制した上での強迫的情熱は、配偶者との関係を悪化させていた。この結果は、強迫的情熱は活動を厳格に継続させるため、時間を忘れて夜通しネットサーフィンをしたり、配偶者からの呼びかけを無視したりすることによるコミュニケーション不全を引き起こした結果であると考えられる。一方、調和的情熱は、配偶者との関係に有意な影響を与えていなかった。この結果は、調和的情熱は必要な時には情熱を傾けている活動を中断することができることと関係しているからであると考えられる。

上記の二つの研究は、情熱と対人関係との間で個人が経験する葛藤の有無が、パートナーとの関係の満足感に影響を与えることを示しているが、この葛藤には情熱を傾けている活動を行っている時と行ってない時の要因が混在していると考えられる。これに対して、活動を行っている最中の要因に限定して、情熱が対人関係に与える影響について検討した研究がある。Philippe, Vallerand, Houliort, Lavigne, & Donahue

(2010) は、それぞれ仕事、特定の集団活動、バスケットボールに情熱を傾けている会社の従業員、大学生、中学生と高校生を対象とした調査を行った結果、全ての対象において調和的情熱が活動中のポジティブ感情を増大させ、活動中のポジティブ感情が対人関係の質を上昇させていることを示した。また調和的情熱は活動中のネガティブ感情を減少させていた。これに対して強迫的情熱は活動中のネガティブ感情を増大させ、活動中のネガティブ感情が対人関係の質を低下させていた。強迫的情熱は活動中のポジティブ感情に有意な影響を与えなかった。この結果は、ポジティブ感情が関係の質を高めるという以下の実証的な証拠に基づいていると考えることができる。Fredrickson (2001) と Waugh & Fredrickson (2006) は、ポジティブ感情は笑顔を促進し、他者との活動、親密さ、他者への自己開示を促進することを示した。調和的情熱は、情熱を傾ける活動に没頭している最中のポジティブ感情の生成に正の影響を与える (Philippe et al., 2010; Vallerand et al., 2003; Vallerand, Rousseau et al., 2006) ので、ポジティブ感情を媒介して他者との関係性の質に正の影響を与えるものと予想できる。逆に強迫的情熱は、概して情熱を傾けている活動中のポジティブ感情の生成に負の影響を与えるので、他者との関係性に負の影響を与えるものと考えられる。

Ratelle, Carbonneau, Vallerand, & Mageau (2007) は、より性的に親密な関係性に情熱が与える影響について検討した。その結果、調和的情熱は親密な関係の強固さを促進していた。一方、強迫的情熱は有意な影響を与えていなかった。さらに Ratelle et al. (2007) は、情熱が性的な満足感に与える影響を検討した結果、2人の愛の関係性に対する男性と女性の調和的情熱の両方が、女性が感じる2人の全般的な関係性の満足感に正の影響を与えたことを示した。さらに、男性の調和的情熱は、女性の調和的情熱よりも、女性のセックスに対する満足感の強い予測因子であることを示した。男性の強迫的情熱は、女性のセックスに対する満足感に負の影響を与えていた。女性の調和的および強迫的情熱も男性が感じる全般的な満足感やセックスに対する満足感に同様の影響を与えたが、男性の情熱よりも与える影響は弱かった。これらの結果が示していることは、愛する人に対する調和的情熱は、個人が感じる全般的な関係性の満足感に正の影響を与えるだけでなく、パートナーが経験する満足感にも影響を与えるということである。

情熱とパフォーマンスとの関連

様々な分野におけるエキスパート達は数年、あるいは数十年にわたって特定の活動に熱心に取り組み続け偉大な業績を残すが、取り組み続ける動機や、その結果得られる業績に情熱が一定の役割を果たしている。

Vallerand et al. (2008) は、トップレベルの高校生の男女のバスケットボール選手を対象として、情熱がパフォーマンスに与える影響について一つのシーズンを通じた縦断的研究を行った。その結果、選手の強迫的情熱も調和的情熱も、コーチが評定した選手の練習への取り組みの質を媒介要因として、パフォーマンスに正の影響を与えていた。同様の結果が演劇の製作者を対象とした調査でも得られた (Vallerand et al., 2007)。この研究では、強迫的情熱も調和的情熱もパフォーマンスには正の影響を与えていたが、活動中の人生に対する満足感に対しては調和的情熱が正の影響を与えていたのに対して、強迫的情熱は有意な影響を与えていなかった。この2つの研究で示されたことは、強迫的情熱も調和的情熱も練習の質の良さを媒介変数として、1年後程度のパフォーマンスを向上させるということである。

さらに Vallerand et al. (2008) は情熱と練習の質の良さを媒介する変数として、アスリートを対象に達成目標理論 (Elliot & Church, 1997; Elliot & Harackiewicz, 1996) の3つの型である熟達目標 (mastery goal) (個人のコンピテンスを高めて課題を熟達することに焦点を当てる)、遂行接近目標 (performance-approach goal) (他者と比較してコンピテンスを獲得することに焦点を当てる)、遂行回避目標 (performance-avoidance goal) (他者と比較して劣っていないことを確認することに焦点を当てる) を媒介変数として想定し、情熱が達成目標理論の3つの型との関係を検討した。その結果、調和的情熱は熟達目標とのみ有意な正の相関関係にあったのに対して、強迫的情熱は、熟達目標、遂行接近目標、遂行回避目標の全てと有意な相関関係にあった。この結果は、調和的情熱が自律的な内在化がなされており、従って活動に純粹に興味を持って取り組むのに対して、強迫的情熱は統制された内在化がなされているため、活動への純粹な興味他に、成功することや失敗しないことといった随伴物を獲得することを志向させるものと考えられる。

上記の結果を受けて、Vallerand et al. (2008) は、ジュニアの国代表レベルのシンクロナイズドスイミングの選手を対象として、情熱と達成目標理論の3つの型と練習の質がパフォーマンスに与える影響について1シーズンを通じた縦断的な検討を行った。その結果、調和的情熱は、熟達目標にのみ有意な正の影響を与えていた。強迫的情熱は熟達目標、遂行接近目標、遂行回避目標の全てに有意な正の影響を与えていた。さらに熟達目標のみが練習の質に有意な正の影響を与えており、練習の質がパフォーマンスに有意な正の影響を与えていた。接近回避目標はパフォーマンスに有意な負の影響を与えていた。精神的健康の指標として取り上げた主観的幸福感と情熱の関連では、調和的情熱が

主観的幸福感に正の影響を与えていたのに対して、強迫的情熱は有意な影響を与えていなかった。以上から、このモデルは、若者でも比較的高齢の人であっても、高いパフォーマンスを発揮している人の情熱と達成目標理論、パフォーマンス、精神的健康の関係を頑健に示していると考えることができる。

まとめると、調和的情熱は熟達目標を介して練習の質に正の影響を与え、その結果パフォーマンスを向上させる。強迫的情熱は、調和的情熱と同様のプロセスを経てパフォーマンスを向上させる一方、遂行回避目標を介してパフォーマンスに負の影響を与えることがある。これは、他者に勝つことを目標にすることが内発的な動機づけになり得ることを示す一方で、最終的にはパフォーマンスの向上には有効ではないことを示唆していると考えられる。

情熱の形成要因

ここまででは情熱が他の変数に与える影響について概観してきた。ここでは、情熱に影響を与え、情熱を形成する要因に関する研究を概観することとする。

特定の活動に対して個人が情熱を傾けるようになるプロセスは、活動の選択 (activity selection)、活動の価値づけ (activity valuation)、アイデンティティへの内在化の方法の型 (type of internalization of the activity representation in one's identity) の3段階を経ると仮定されている (Vallerand, 2008)。活動の選択は、他の活動と比較した際の特定の活動に対する個人の好みである。選択した活動に興味があり、アイデンティティに一致している程、個人はその活動に対して情熱を傾けるようになる。

活動の価値づけは、個人が特定の活動を重視している程度である。活動の価値づけは、特定の活動を個人のアイデンティティや自己に内在化するに当たって重要な役割を果たす。実際、個人にとって特定の目標が高く価値づけられている場合、個人はその目標を内在化する傾向があることが実証されている (Aron, Aron, & Smollan, 1992; Deci, Eghrari, Patrick, & Leone, 1994)。特定の活動が個人にとって価値づけられていればいる程、その活動は個人のアイデンティティに内在化されるようになり、結果として個人はその活動により情熱を傾けるようになる。従って、活動の価値づけは、特定の活動に対して情熱を形成するための強度の次元である (Vallerand, 2008)。

特定の活動が価値づけられた後に、アイデンティティへの内在化の型が決定される。内在化の型の決定は、特定の活動に対して形成された情熱の質の次元である (Vallerand, 2008)。統制された内在化は、強迫的情熱を形成すると予想され、自律的な内在化は調和的情熱を形成すると予想される。社会的環境は、活動の選択や活動の価値づけに対する個人の自律性に影響を与える (Deci & Ryan, 1987)。実際、保護者や教

師が児童に自律的な支援を行うと、児童は勉強等のような元々は興味を持っていなかった活動を価値づけ、自律的に内在化する傾向があるといわれている (Grolnick & Ryan, 1989)。同様のプロセスが情熱にも当てはまると考えられる。つまり、自律的な支援は、個人が特定の活動を自律的に内在化することを促進して調和的情熱を形成し、逆に重要な社会的環境によって統制された内在化は強迫的情熱を形成すると予想される (Vallerand, 2008)。

情熱が形成される上記の3段階の過程の1部を実証的に示した研究が二つある。一つ目の研究として、Mageau, Vallerand, Cyharest, Salvy, Lacaille, Bouffard, & Koestner (2009) は、平均9年8ヵ月続けている12歳から38歳までのエキスパートレベルの音楽家およびアスリート (研究1)、科学、ダンス、ネイチャー・ゲーム等の様々な特定の活動を平均3年続けている6歳から16歳までの中級者 (研究2)、11歳から15歳までの中学の授業で初めて楽器の演奏を行った初心者 (研究3) を対象とした研究を行った。調査内容は、情熱を促進する要因として、保護者や指導者から受けた自律的な支援の程度、活動に対する保護者や指導者の価値づけ、自分が活動を好きな程度、活動とアイデンティティが重なっている程度の4要因である。その結果、研究3では、保護者や指導者の活動に対する価値づけのみが強迫的情熱に正の影響を与え、他の3要因が調和的情熱を促進することが示された。また、研究1~3の全てにおいて、保護者や指導者の自律的な支援は調和的情熱を高めていた。研究1と2では、活動に対する保護者や指導者の価値づけ、自分が活動を好きな程度、活動とアイデンティティが重なっている程度は、強迫的情熱を高めていた。ただし、4要因の全てが、特定の活動に対する情熱を高めており、活動のパフォーマンスに影響を与えるのは、調和的情熱のみという結果と調和的情熱と強迫的情熱の両方であるという結果が混在していた。以上より、熟達の水準によって情熱を形成する要因が異なることが示された。二つ目の研究として、Liu, Chen, & Yao (2011) は、企業に勤務する従業員を対象として、自律性と調和的情熱の相互作用が個人の創造性に与える影響について検討した。その結果、組織による個人への自律性の支援は、個人の自律性への志向性を高め、自律性への志向性が個人の調和的情熱に正の影響を与えることが示された。さらに、個人の調和的情熱は、組織が個人へ行う自律性の支援および個人の自律性への志向性に正の影響を与えることが示され、組織による個人への自律性の支援、個人の自律性への志向性、調和的情熱の3要因が互いに影響し合って、個人の創造性を高めることを示した。この研究は、調和的情熱を形成する要因として自律性が重要な役割を果たしていることを示しただけでなく、調和的情熱もまた自律性を促進

することを示した。

活動の内在化に影響を与える要因として、社会的環境の他にパーソナリティを挙げることができる。Vallerand(1997) およびVallerand(2001) は、何かを行う時に喜びや自主的な選択を重視する自律的なパーソナリティ傾向は、もともと興味のなかった活動を内在化する際に、自律的な内在化を促す傾向があることを示した。それに対して、何かを行う時に内的あるいは外的な圧力があるから行うという統制されたパーソナリティ傾向は、もともと興味のなかった活動を内在化する際に、圧力のかかった内在化を行うことが示された (Guay, Mageau, & Vallerand, 2003; Vallerand, 1997)。

今後の課題

本研究では、情熱を強迫的情熱と調和的情熱の観点からなされた実証研究を中心に概観してきた。以下では、情熱研究に残されている課題と今後検討されるべき点について述べる。

情熱の質の変化について

特定の活動に対して形成される情熱には、普遍的な形成過程があるのか、それとも状況や個人によって形成過程に違いがあるのか検討する必要がある。例えば、特定の活動に対して形成された強迫的情熱は、後に調和的情熱に変化することはあるのだろうか。それとも一度形成された強迫的情熱は、強迫的情熱から変化することはないのだろうか。これについてはこれまでほとんど実証的な検討は行われていないが、唯一Vallerand et al.(2003) は、特定の活動に従事している期間と2種類の情熱の間に有意な関連がなかったことを示した。この研究は横断的の検討であり、あくまで予備的な解釈しかできないが、活動に従事している期間は、情熱の質の変化に関係であると考えられる。特定の活動に対する情熱に質的な変化があるか否かを検討するためには、縦断的な検討を行う必要がある。

コンピテンスと関係性が情熱に与える影響について

今までのところ、自己決定理論の自律性が情熱の形成に関与している実証的な証拠が提示されているが、コンピテンスおよび関係性についてはほとんど行われていない。コンピテンスに関しては、特定の活動に没頭している人が、コンピテンスがあって活動に対するパフォーマンスが上がっていると知覚されている場合、コンピテンスがあるのにパフォーマンスが上がらないと知覚されている場合、コンピテンスがないのにパフォーマンスが上がっていると知覚されている場合、コンピテンスがなくパフォーマンスも上がらないと知覚されている場合に形成される情熱の種類について検討するべきである。特定の活動に対して一定水準以上の熟達段階に達したと個人が知覚したとして

も、コンピテンスを知覚しているとは限らない (Deci & Ryan, 2000)。しかし、一定の熟達段階に達すると、人はその活動を“未来の自己 (future self)”として認識し、実際にアイデンティティに内在化されることがある (Markus & Nurius, 1986)。活動をアイデンティティに内在化することが、情熱を形成する条件の一つである (Mageau et al., 2009) ことから、個人が知覚するコンピテンスや熟達段階の感覚は情熱の形成に何らかの影響を与えるものと考えられることができる。関係性と情熱の関連については、これまでのところ著者らの知る限り、理論的にも実証的にもほとんど示されていない。

強迫的情熱と調和的情熱が有する機能の異同について

本研究で概観してきたように、情熱が心身の健康やパフォーマンスに与える影響についてこれまでに行われてきた研究の多くは、調和的情熱が心身の健康やパフォーマンスを促進し、強迫的情熱は心身の健康やパフォーマンスに必ずしも良い影響を与えるわけではないという結果を示している。しかし、以下の三つの研究が示しているように、どんな場合であっても調和的情熱が強迫的情熱よりも機能的に優れていると結論することはできない。

第1に、情熱に関する研究は、10年を超える長期的な縦断的研究が行われていない。Ericsson & Charness (1994) によると、音楽とスポーツでは、通常少なくとも10年以上特定の活動に人生をかけて没頭し続けなければ、最も高いレベルのパフォーマンスに到達することはできない。このようなレベルにある個人にとって、強迫的情熱と調和的情熱のどちらが心身の健康に強い影響を与えているのかを検討した研究は存在しないだけでなく、10年以上の長期にわたって特定の活動に没頭させる情熱が何であるのかを実証した縦断的研究も存在しない。

第2に、特定の状況下では、強迫的情熱が調和的情熱よりも心身の適応に良い影響を与えるという結果を示した研究が存在する。10代のトップレベルのホッケー選手を対象とした研究では、強迫的情熱は、競技レベルが自分よりも低いリーグでプレイし、かつ競技に没頭していない時のみ精神的健康に負の影響を与えることが示された (Amiot, Vallerand, & Blanchard, 2006)。さらに、より競争的なリーグでプレイしているホッケー選手では、強迫的情熱の方が調和的情熱よりも精神的健康に強い正の影響を与えていることが示された (Amiot et al., 2006)。

第3に、調和的情熱は“常識的な行動 (acceptable behaviors)”に対して強い影響力を有するが、“極端な行動 (extreme behaviors)”に対しては強迫的情熱が強い影響力を発揮するという結果を示した研究が存在する。Rip, Vallerand, Grenier, Lafrenière, & Charbonneau(2007) は、特定の政治的活動に情熱を

傾けている人を対象とした研究を行った結果，“常識的な行動”（政治に興味のない人に政治の大切さを説得する）に対しては，調和的情熱がより適応的に機能した（説得が成功し，自尊心が上昇した）が，“極端な行動”（特定の政治的信念を強く抱いている人を説得して，別の政治的信念を持たせる）には，調和的情熱は影響力を有しない（説得は失敗するが，自尊心は変化しない）ことを示した。逆に，強迫的情熱は，“常識的な行動”に対しては適応的に機能せず（説得に失敗し，自尊心が低下する），“極端な行動”に対しては影響力を発揮した（説得に成功し，自尊心が上昇した）ことを示した。

今後は，長期的な縦断的研究および特定の条件下における強迫的情熱と調和的情熱が心身の健康やパフォーマンスに与える影響についてより詳細な検討を行うことが望まれる。

結 論

本研究では，強迫的情熱と調和的情熱からの視点を中心に情熱に関する心理学的実証研究を概観してきた。主に，調和的情熱は，個人が葛藤を抱えることなく情熱を傾けている活動とそれ以外の活動を両立することができ，強迫的情熱はできないことが示された。また，調和的情熱は強迫的情熱と比較して，多くの場合，認知的，感情的，行動的に適応的な結果を導くことが示された。

ポジティブ心理学（Seligman & Csikszentmihalyi, 2000）では，“人はどのようにしたら生きるに値する生活を送ることができるのか(How people’s lives can be most worth living?)”という問題を提起している。情熱研究の文脈からは，意味ある生活を送るための一つの答えとして，現段階では調和的情熱を提案することができる。しかし，これまで概観してきたように，調和的情熱にも強迫的情熱にも今後解明されるべき多くの機能や効用が残されている。例えば，対人専門援助職において提供するサービスの質の向上に情熱が与える影響と，そうした結果が反映された場合とされなかった場合に情熱が受ける影響，トップアスリートが有している情熱の種類，一般の人が有している情熱が生きがいに与える影響等を検討する必要がある。情熱の心理学的研究は我々に多くの実りある恩恵を与えると予想できるにも関わらず，世界的にもまだ始められたばかりである。わが国においては，著者らの知る限りほとんど行われていない。今後，情熱に関するより多くの実証研究が行われることが望まれる。

引用文献

Amiot, C., Vallerand, R. J., & Blanchard, C. (2006). Passion and psychological adjustment: A

test of the person-environment fit hypothesis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 220-229.

Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.

Carbonneau, N., Vallerand, R. J., Fernet, C., & Guay, F. (2008). The role of passion for teaching in intrapersonal and interpersonal outcomes. *Journal of Educational Psychology*, 100, 977-987.

Castelda, B. A., Mattson, R. E., MacKillop, J., Anderson, E. J., & Donovan, P. J. (2007). Psychometric validation of the Gambling Passion Scale in an English-Speaking university sample. *International Gambling Studies*, 7, 173-182.

Crocker, J., & Park, L. E. (2004). The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, 130, 392-414.

Csikszentmihalyi, M. (1978). Intrinsic rewards and emergent motivation. In M. R. Lepper & D. Greene (Eds.), *The hidden costs of reward*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.205-216.

Deci, E. L., Eghrari, H., Patrick, B. C., & Leone, D. R. (1994). Facilitating internalization: The self-determination perspective. *Journal of Personality*, 62, 119-142.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1987). The support of autonomy and the control of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1024-1037.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.

Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. In M. L. Maehr & P. R. Pintrich (Eds.), *Advance in motivation and achievement Vol.10*. Greenwich, CT: JAI Press. pp.143-179.

Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996). Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A meditational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 968-980.

Ericsson, K. A. & Charness, N. (1994). Expert performance: Its structure and acquisition. *American Psychologist*, 49, 71-76.

Fredricks, J. A., Alfeld, C., & Eccles, J. (2010).

- Developing and fostering in academic and nonacademic domains. *Gifted Child Quarterly*, 54, 18-30.
- Fredrickson, B. L. (1998). What good are positive emotions? *Review of General Psychology*, 2, 300-319.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American psychologist*, 56, 218-226.
- Fredrickson, B. L. (2003). The value of positive emotions. *American Scientist*, 91, 330-335.
- Fredrickson, B. L., & Joiner, T. (2002). Positive emotions trigger upward spirals toward emotional well-being. *Psychological Science*, 13, 172-175
- Frijda, N. H., Mesquita, B., Sonnemans, J., & Van Goozen, S. (1991). The duration of affective phenomena or emotions, sentiments and passions. In K. T. Strongman (Ed.), *International review of studies on emotion* (Vol.1). New York: Wiley. pp.187-225.
- Glasser, W. (1976). *Positive addiction*. New York: Harper & Row.
- Goldberg, C. (1986). The interpersonal aim of creativity endeavor. *Journal of Creative Behavior*, 20, 35-48.
- Grolnick, W. S., & Ryan, R. M. (1989). Parent styles associated with children's self-regulation and competence in school. *Journal of Educational Psychology*, 81, 143-154.
- Guay, F., Mageau, G. A., & Vallerand, R. J. (2003). On the hierarchical structure of self-determined motivation: A test of top-down, bottom-up, reciprocal, and horizontal effects. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 992-1004.
- Hatfield, E., & Walster, G. W. (1978). *A new look at love*. Reading, MA: Addison Wesley.
- Hatori, K., Ishimura, I., Ichimura, S., & Koganei, K. (2013). Passion among Japanese college students: Development of the Japanese version of the passion scale. *Proceedings of the Global Symposium on Social Sciences 2013*, 4, 471-480.
- Hodgins, H. S., & Knee, R. (2002). The integrating self and conscious experience. In E. L. Deci, & R. M. Ryan, (Eds.), *Handbook on self-determination research: Theoretical and applied issues*. Rochester, NY: University of Rochester Press. pp.87-100.
- Koestner, R., & Loiser, G. F. (2002). Distinguishing three ways of being highly motivated: A closer look at introjection, identification, and intrinsic motivation. In E.L. Deci, & R.M. Ryan, (Eds.), *Handbook on self-determination research: Theoretical and applied issues*. Rochester, NY: University of Rochester Press. pp.101-121.
- Liu, D., Chen, X. P., & Yao, C. (2011). From autonomy to creativity: A multilevel investigation of the mediating role of harmonious passion. *Journal of Applied Psychology*, 96, 294-309.
- Mageau, G. A., Vallerand, R. J., Charest, J., Salvy, S., Lacaille, N., Bouffard, T., & Koestner, R. (2009). On the development of harmonious and obsessive passion: The role of autonomy support, activity specialization, and identification with the activity. *Journal of Personality*, 77, 601-646.
- Markus, H. & Nurius, P. (1986). Positive Selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- Marsh, P., & Collet, P. (1987). Driving passion. *Psychology Today*, 21, 16-24.
- Philippe, F. L., Vallerand, R. J., Houliort, N., Lavigne, G. L., & Donahue, E. G. (2010). Passion for an activity and quality of interpersonal relationships: The mediating role of emotions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 917-932.
- Philippe, F., & Vallerand, R. J. (2007). Prevalence rates of gambling problems in Montreal, Canada: A look at old adults and the role of passion. *Journal of Gambling Studies*, 23, 275-283.
- Ratelle, C. F., Carbonneau, N., Vallerand, R. J., & Mageau, G. (2007). Passion in the romantic sphere: A look at relational outcomes. *Motivation and Emotion*.
- Ratelle, C. F., Vallerand, R. J., Mageau, G. A., Rousseau, F. L., & Provencher (2004). When passion leads to problematic outcomes: A look at gambling. *Journal of Gambling Studies*, 20, 105-119.
- Rip, B., Fortin, S., & Vallerand, R. J. (2006). The relationship between passion and injury in dance students. *Journal of Dance Medicine & Science*, 10, 14-20.
- Rip, B., Vallerand, R. J., Grenier, S., Lafrenière, M. K., & Charbonneau, M-E. (2007). *Passion for sovereignty: Harmonious and obsessive passion in the political arena*. 3rd International Congress on Self-Determination Theory, Tront, Ontario,

- Canada.
- Rousseau, F. L., & Vallerand, R. J. (2003). The role of passion in the subjective well-being in elderly. *Revue Québécoise de Psychologie*, 24, 197-211.
- Rousseau, F. L., & Vallerand, R. L. (2008). An examination of the relationship between passion and subjective well-being in older adults. *International Journal of Aging and Human Development*, 66, 195-211.
- Rousseau, F. L., Vallerand, R. J., Ratelle, C. F., Mageau, G. A., & Provencher, P. J. (2002). Passion and gambling: On the validation of the Gambling Passion Scale (GPS). *Journal of Gambling Studies*, 18, 45-66.
- Séguin-Lévesque, C., Laliberté, M-L., Pelletier, L. G., Blanchard, C., & Vallerand, R. J. (2003). Harmonious and obsessive passion for the internet: Their association with the couple's relationships. *Journal of Applied Social Psychology*, 33, 197-221.
- Seligman, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14.
- Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. *Advances in Experimental and Social Psychology*, 29, 271-360.
- Vallerand, R. J. (2001). A hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation in sport and exercise. In G. Roberts (Ed.), *Advances in motivation in sport and exercise*. Champaign, IL: Human Kinetics. pp.263-319.
- Vallerand, R. J. (2008). On the psychology of passion: In search of what makes people's lives most worth living. *Canadian Psychology*, 49, 1-13.
- Vallerand, R. J., Blanchard, C., Mageau, G. A., Koestner, R., Ratelle, C., Léonard, M., & Gagné, M., & Marsolais, J. (2003). Les Passions de l'Âme: On obsessive and harmonious passion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 756-767.
- Vallerand, R. J., & Houliort, N. (2003). Passion at work: Toward a new conceptualization. In S. W. Gilliland, D. D. Steiner, & D. P. Skarlicki (Eds.), *Emerging perspectives on values in organizations*. Greenwich, CT: Information Age Publishing. pp.175-204.
- Vallerand, R. J., Mageau, G. A., Elliot, A., Dumais, A., Demers, M-A, & Rousseau, F. L. (2008). Passion and performance attainment in sport. *Psychology of Sport & Exercise*, 9, 373-392.
- Vallerand, R. J., Paquet, Y., Philippe, F. L., & Gharest, J. (2010). On the role of passion for work in burnout: A process model. *Journal of Personality*, 78, 289-312.
- Vallerand, R. J., Rousseau, F. L., Grouzet, F. M. E., Dumais, A., & Grenier, S. (2006). Passion in sport: A look at determinants and affective experiences. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 28, 454-478.
- Vallerand, R. J., Salvy, S. J., Mageau, G. A., Elliot, A. J., Denis, P., Grouzet, F. M. E., & Blanchard, C.B. (2007). On the role of passion in performance. *Journal of Personality*, 75, 505-533.
- Waugh, C. E., & Fredrickson, B. L. (2006). Nice to know you: Positive emotions, self-other overlap, and complex understanding in the formation of new relationships. *Journal of Positive Psychology*, 1, 93-106.

—2017. 1.30受稿, 2017. 3. 1受理—